20260322　受難節 第５主日礼拝

司式:吉田千鶴子
奏楽:堀口　恵美

前奏:「世よ、われ汝に別れを告げ」(J.ブラームス)

招詞:主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに。
主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。(イザ55.6,7b)

讃美歌:303「丘の上の主の十字架」

交読詩編119.25-32

(アルファベットによる詩)(ダレト)
25 わたしの魂は塵に着いています。御言葉によって、命を得させてください。
26 わたしの道を申し述べます。わたしに答え、あなたの掟を教えてください。
27 あなたの命令に従う道を見分けさせてください。わたしは驚くべき御業を歌います。
28 わたしの魂は悲しんで涙を流しています。御言葉のとおり、わたしを立ち直らせてください。
29 偽りの道をわたしから遠ざけ/憐れんで、あなたの律法をお与えください。
30 信仰の道をわたしは選び取りました/あなたの裁きにかなうものとなりますように。
31 主よ、あなたの定めにすがりつきます。わたしを恥に落とさないでください。
32 あなたによって心は広くされ/わたしは戒めに従う道を走ります。

朗読聖書①哀歌3.19-27

◆第三の歌(アルファベットによる詩)
19 苦汁と欠乏の中で/貧しくさすらったときのことを
20 決して忘れず、覚えているからこそ/わたしの魂は沈み込んでいても
21 再び心を励まし、なお待ち望む。
22 主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。
23 それは朝ごとに新たになる。「あなたの真実はそれほど深い。
24 主こそわたしの受ける分」とわたしの魂は言い/わたしは主を待ち望む。
25 主に望みをおき尋ね求める魂に/主は幸いをお与えになる。
26 主の救いを黙して待てば、幸いを得る。
27 若いときに軛を負った人は、幸いを得る。

朗読聖書②マタイによる福音書9.18-26

◆指導者の娘とイエスの服に触れる女
18 イエスがこのようなことを話しておられると、ある指導者がそばに来て、ひれ伏して言った。「わたしの娘がたったいま死にました。でも、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、生き返るでしょう。」
19 そこで、イエスは立ち上がり、彼について行かれた。弟子たちも一緒だった。
20 すると、そこへ十二年間も患って出血が続いている女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れた。
21 「この方の服に触れさえすれば治してもらえる」と思ったからである。
22 イエスは振り向いて、彼女を見ながら言われた。「娘よ、元気になりなさい。あなたの信仰があなたを救った。」そのとき、彼女は治った。
23 イエスは指導者の家に行き、笛を吹く者たちや騒いでいる群衆を御覧になって、
24 言われた。「あちらへ行きなさい。少女は死んだのではない。眠っているのだ。」人々はイエスをあざ笑った。
25 群衆を外に出すと、イエスは家の中に入り、少女の手をお取りになった。すると、少女は起き上がった。
26 このうわさはその地方一帯に広まった。

祈祷

十字架への道を歩まれた主イエスをこの世にお遣わしになられた愛と慈しみに富み給う主なる神さま、あなたの聖名を賛美します。

ライブ配信や会堂に集う私たち一人ひとりに新しい朝(あした)を備えてくださり、夫々の名を呼んで、あなたの礼拝に与らせてくださいますこと、心より感謝致します。今、献げるこの礼拝が神さまご自身の真の栄光が現わされる礼拝となりますよう、御霊をもってこの所に臨んでいてくださいますように祈ります。

私たちは神さまがお造りになり、この世のものとして神さまによって生かされています。けれども自らのために隔ての壁を作り、神の平和を脅かし、隣人に対する愛に乏しく、御言葉に背くことが多くあったことを御前に告白致します。どうか今日与えられるあなたの御言葉により、新たな命を得ることができるようになさしめてください。

世界の平和のために祈ります。世界各地で次々と武力攻撃が行われ、暴力による破壊が止まず、戦争が日増しに拡大しています。戦禍による悲しみと絶望の中にある方々にあなたの特別な慰めと癒しがありますように、子供たちが希望を持つことができますように、為政者がこの戦争を一刻も早く集結させるよう神さまが導いてくださいますように願います。

教会では今年も東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故に被災された方々を覚えてチャリティー・コンサートを開催することができました。願いを共にする演奏者が与えられ、あなたによってこの会が守られ、豊かな時が与えられましたことに感謝致します。この活動があなたの御心にかなったものになりますようお導きください。

この世の論理が全てあなたへの背きとはなりませんが、戦争、東日本大震災やその他の震災、原発事故などによる被災された方々の苦しみや悲しみ、困難な状況、これはこの世の論理から引き起こされていると言って過言ではなく、私たちもこの論理に絡め取られています。先の主日で主イエスが“否”と言われました。主イエスは“**この世界を規定し動かしている支配構造、そしてエルサレムへの道が栄誉や名声、権力が約束されている道ではない**”と言われました。そしてこの世の論理を打ち砕かれました。私たちは主イエスにより、この世の論理から実は自由にされていることに気づかされました。今、主の御跡に従って教会はこの世の論理から自由にされ、御言葉によって主の平和を実現する者たちの群れへと変えられますように。教会の中にこの世の論理を持ち込むのではなく、教会員一人ひとりがお互いに仕える者となり、皆が僕となることができますように、御言葉によって立つ希望を求める主の教会とされますように、聖霊の導きと神さまのお支えを祈ります。

愛に富み給う神さま、本日、この礼拝を共に与ることができない兄弟姉妹を、あなたの豊かな愛と御恵みで充たしてください。私たち教会の肢々を、あなたの愛によって一つとしてください。様々な困難を抱える者、孤独の中にある者、愛する者をあなたの御許に送った者、あなたの救いとお支えを必要としている全ての者に、あなたの慰めと慈しみと励ましがありますように、主の平安を願います。

今日の説教者を感謝致します。御言葉を取り次ぐ牧者が聖霊により強められ、大胆にあなたの御言葉が語られますように。聞く私たちの心の目と耳を開かせてください。語られた御言葉が新しい糧となり、主イエスの御受難を見つめて歩むことができますように、聖霊の導きを祈ります。全て

が主の御心になりますように。この祈りを主イエス・キリストの聖名によって御前にお献げ致します 。アーメン。

**讃美歌:432「重荷を負う者」**

**説教 「絶望をこえて」　　佃　雅之**

今朝与えられた『**マタイによる福音書**』にはキリストによる二つの癒しの御業が記されています。どちらも命に関わる深刻な出来事です。本来なら、夫々一つの物語として語られてもよいものです。しかし福音書は、これらを別々のものとしてではなく重ね合わせて語ります。一つの問題だけでも大変なのに、もう一つの問題が重なる、それは私たちの人生の中にも実際に起こってくることではないでしょうか。ある日突然病に襲われる、家庭の中で問題が起こる、さらに社会の不安も押し寄せてくる、教会においても様々な問題が重なって起こります。問題が重なる時、私たちは思わず、“**もう駄目だ**”と感じてしまいます。“**なぜ今、さらに別の問題が起こるのか**”と嘆きます。しかし聖書は二つの出来事を重ねることで主の力の大きさを示すのです。キリストは一二年にわたる苦しみを終わらせる方であり、同時に失われた命を起き上がらせるお方なのです。ここで起こっていることは単なる癒しや奇蹟ではありません。失われたと思われていた命が取り戻され、人にはどうすることもできない死という現実が打ち破られていくのです。キリストは、この後十字架に架かり、死なれ、そして復活されます。それは死の支配そのものを打ち破る決定的な御業です。死をも打ち破る神の力が今一人の人の絶望のただ中に差し出されようとしています。

「**ある指導者**」が現れキリストにひれ伏します。マタイは「**ある指導者**」と記していますが、他の福音書によれば、この人は「**会堂長**」です。会堂長とは礼拝を整え、会堂を管理し、共同体を導く責任を負う人です。彼は宗教的にも社会的にも尊敬される立場にあり、重い責任を負っている人物でした。しかし今、その地位も名誉も何の助けにもなりません。彼は今、“**娘が死んでしまった**”という絶望の中に立たされています。愛する娘の命を前にして人間の限界を思い知らされたのです。だから彼は自分がこれまで拠り所にしてきた地位も名誉も、その全てを脇に置いて、キリストの前に「**ひれ伏し**」ました。人は自分で何とかできると思っているうちは、なかなか神にひれ伏すことができません。しかしここには娘を失った一人の父親がいます。死という現実の前に立たされた一人の人間です。その人が残された一つの希望を持ってキリストの前に来たのです。

「**おいでになって手を置いてください。そうすれば、生き返るでしょう**」とあります。これはキリストに全てを託す言葉です。キリストは信頼に応えるために「**立ち上がり、彼について行かれ**」ます。ところがその途中でもう一つ出来事が起こります。

一二年もの間、出血の病に苦しんできた一人の女性がキリストに近づいてきたのです。彼女の苦しみは病だけではありませんでした。当時の律法理解では、出血のある女性は汚れた者とされ、人との交わりからも、神の前に出ることからも遠ざけられていました。そのため彼女は、人と自由に関わることも、礼拝に出ることもできません。肉体的な苦しみに加え、治療に費やしたであろう経済的な負担、社会的な孤独、そして神の前に出ることができないという宗教的な断絶、その全てを背負って生きてきたのです。彼女は人目を避けるように後ろから近寄って、この方の「**服の房に触れ**」さえすれば癒されると信じて、そっと手を伸ばします。

会堂長と出血に苦しむ女性、この二人は同じ所に立たされていました。できることは全てしてきた、もう道はない、もう打つ手はない、人の力は尽きてしまったのです。絶望の中でこの二人の心に一つの思いが生まれます。この方なら何とかしてくださるのではないか、この方ならこの絶望にも耳を傾けてくださるのではないか、そのような思いが二人をキリストのもとへと向かわせたのです。

キリストはすぐに立ち上がられます。そしてその途中で、そっと後ろから服の房に触れたことにも気づかれます。ここに示されているのは、主にすがろうとする小さな信仰を見逃されることのないキリストの眼差しです。キリストはただ出来事を見ておられるのではありません。この二人の心の奥にある言葉にならない苦しみを、どうにもならない絶望を見逃されなかったのです。急ぐ中にあっても主は立ち止まり「**振り向いて**」くださるのです。

「**振り向く**」という言葉には大切な意味があります。キリストの服の房に触れたのは彼女だけではなかったかもしれません。群衆が押し合う中で多くの人の手がキリストに触れていたことでしょう。しかしキリストは、その多くの手の中にあって、信仰を持って伸ばされた一つの手を見逃されませんでした。教会はこのキリストの姿に従って歩む群れです。

しかし教会は、全ての問題を解決できるわけでも、全ての苦しみを取り除けるわけでもありません。私たちが日々心がけることは主に向かおうとする小さな信仰を見逃さないことです。その人を覚え、名を呼び、祈りに覚え、共に礼拝へと歩むことです。人知れず、苦しみながら主を求めている人がいます。声にならない祈りを献げている人がいます。そのような人に目を止め大切にする、それが主に倣う歩みです。

キリストは彼女に「**娘よ**」と呼びかけられました。この呼びかけは彼女を神の家族の交わりの中へと迎え入れる言葉です。彼女は病気を治して頂こうとしてキリストに触れました。しかし主は、その思いを超えて救いをお与えになったのです。キリストは彼女に言われます。「**あなたの信仰があなたを救った。**」これは彼女の中に何か特別な力があったということではありません。彼女には何もなかったのです。“**ただ絶望の中でキリストにすがろうと手を伸ばした**”、それだけでした。キリストが喜ばれた信仰とはそのようなものです。“**よく、わたしの下に来た、よくぞわたしにすがりついた**”と言うのです。“**あなたが救われたのは、その手でわたしに触れたからだ**”と言ってくださるのです。

彼女を救ったのは主イエス・キリストご自身です。彼女はその伸ばした手でキリストから信仰を受け取ったのです。救いは私たちの努力や力によって与えられるものではありません。キリストが与えてくださる恵みです。信仰とはその恵みを受け取ることです。私たちは信じていても揺らぐこともあります。しかし大切なのは、誰に触れているかです。たとえ震える手であっても、その手がキリストに触れているならそこに救いがあります。

キリストは会堂長の家に着かれます。当時のユダヤでは、人が亡くなると葬りのために笛が吹かれました。笛の音が響いているということは、“**この人はもう死んだ**”ということです。そこにいた人々は、もはや少女の回復を期待していませんでした。死が動かすことのできない現実となっていたのです。しかしキリストは集まってきた人たちをご覧になって「**あちらへ行きなさい。**」と言われます。新共同では「**あちらへ行きなさい**」と穏やかな言い方になっていますが、原文を見ると“**退け**”いう厳しい命令の言葉〈**ἀναχωρέω**(アナコウーレイオー)[**帰る.退く**] **命現能 2 複** **Ἀναχωρεῖτε**(アナコウーレイテ)[(**お前たち･あなたが方よ、退け！**]〉になっています。キリストは何を退けら

れたのでしょうか。この言葉は絶望を退ける言葉です。キリストは死が全てであるかのような絶望に“**退け**”と言われたのです。しかしキリストの言葉を聞いていた周りの人々の反応はどうであったでしょうか。「**人々はイエスをあざ笑った**」とあります。或る意味で自然な反応です。“**少女はすでに死んでいる**”、その現実は誰の目にも明らかだったからです。

私たちもまたどうにもならない現実の前に立たされることがあります。取り返すことのできない現実はあるものです。しかしキリストは、絶望の声が充ちる、その場所に来て、全く新しい言葉を語られます。「**少女は死んだのではない。眠っているのだ。**Ἀναχωρεῖτε, οὐ γὰρ ἀπέθανεν τὸ κοράσιον（**アナコウレイト・オウ・ガル・アペタネン・ト・コラシオン**）」これは死そのものの意味を変えてしまう言葉です。

信仰とは絶望の中にある時、私たちはその現実に目を奪われます。けれどもその時、本当に知るべきことは何でしょうか。それは“**そこに誰が来ておられるのか**”と、いうことです。その場所にはキリストが来られました。その時、死は、もはや最後の出来事ではなくなります。

信仰とは、絶望の中でなお主が共に居られることに目を向けることです。この方こそが私たちを救ってくださるからです。キリストは絶望を超えて近づいてきてくださいます。私たちはこの主を思い起こし、その御声を聴くことができるのです。それが私たちに与えられている信仰です。

今朝を読まれました『**哀歌**』3 章には、破壊と喪失の中にある者の叫びが書かれています。目に映る現実は廃墟・沈黙・痛みです。言葉にならない苦しみがそこには満ちています。しかし詩人はこう告白します。「**主の憐れみは決して絶えない。主の慈しみは決して尽きない。それは朝ごとに新たになる。**」

町は滅び、未来は見えません。それでも主に望みを置くなら希望が与えられるのです。私たちは望みを持てる時だけ信仰に生きるのではありません。むしろ望みが断たれたと思える時にこそ、主の慈しみにより頼んで生きる者とされています。“**娘が死んだ**”と告げられた父親も、長血を患った女性も、まだ何も起こっていないその時に、主に望みを置きました。“**娘はすでに死んだ**”と知らされていました。女性の病も長い間癒されることはありませんでした。状況は何一つ良くなってはいません。むしろ人間の目には、“**もう終わり**”としか見えない状態でした。それでも彼らは主のもとに来たのです。そしてキリストは、その信仰に応えて命を回復させられました。「**主の憐れみは尽きることがない**」、それが『**哀歌**』の告白であり、キリストによってもたらされた福音です。

受難節のこの時期、教会は十字架へと向かう主イエスを見つめています。十字架は当時の人々にとって耐え難い苦しみを伴い、しかも人前に曝される最も屈辱的な死でした。そこには希望も栄光もありません。あるのは敗北と絶望だけです。弟子たちにとっても十字架は希望の崩壊でした。しかし弟子たちは絶望を超えて福音を宣べ伝える者とされたのです。

今日の物語を読むとき、私たちはあることに気づかされます。キリストの周りには自分の力ではどうすることもできない人たちが集まっているということです。死んでしまった少女、娘を失った父、一二年もの間病に苦しみ続けてきた女性、いずれも絶望の中にいる人たちでした。そして、そのような人たちが主のもとに集まり、主に触れ、主の言葉を受けて新しい命を与えられていくのです。

時折“**教会に未来はあるだろうか**”そのような言葉が聞こえてくることがあります。確かに教会は弱さを抱えています。思うようにいかないときもあり、失敗を重ねてしまうこともあります。それでも尚、主はこの教会と共に歩んでおられます。聖書が語っている教会は絶望の中ではキリストに手を伸ばす人々の群れです。教会の希望は私たちの強さにあるのではありません。教会の希望は振り向いてくださる主の恵みにあります。私たちもまた恐れや絶望、罪や弱さの中で生きています。しかしイエス・キリストは私たちと共におられ、“**わたしに触れなさい**”と招いておられます。この主を思い起こし、この主に信頼して歩むとき、私たちは新しい命を受けます。主は一人ひとりを決して忘れず覚えていてくださる方です。絶望の中にあってこそキリストの御言葉は響くのです。お祈りを致します。

聖なる神、あなたは御子イエス・キリストをこの世に遣わし、私たちが恐れ・悲しむ死と絶望のただ中にまで来てくださいました。その深い愛を覚え心から感謝致します。主よ、どうか、私たちにあなたの御声を聞く耳を与えてください。自分の力に頼ろうとする心を悔い改め、あなたに向かって手を伸ばす信仰を与えてください。この教会が十字架の主に従い、苦しむ人のもとへ歩み出る群れとされますように、主よ、私たちの歩みをあなたの御手に委ねます。十字架の恵みによって支え、復活の希望へと導いてください。主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

**讃美歌:531「主イェスこそわが望み」**

**献金・感謝(小林正道)・主の祈り(讃美歌 21 93-5A)**

天の父なる神さま、主の聖名を崇め、心より賛美致します。今日この時この所まで守ってくださり、支えてくださったことを覚え、真に感謝致します。今日この受難節の第 5 主日の礼拝を、佃先生のそのメッセージを通して多くの恵みを頂きました、感謝致します。主に従う、お委ねする大切さ、そして主と共に歩む大切さを改めて知ることができ感謝致します。どうぞこれらの恵みを私たちの心の中に留め、これからの信仰生活に糧として導いてくださいますようにお願い致します。私たちは御霊と御言葉によって生かされている喜びを知り、そしてあなただけを神として、その栄光を褒め称える気持ちにさせてくださいますようにお願い致します。

今、私たちは必要な物を与えられ、その蓄えの中からその一部を献金として献げました。どうぞ清めて用いて、これからの教会生活にお役立てください。今主が示されました「**主の祈り**」を共に献げ、これから始まる新しい日々を歩ませてください。「**主の祈り**」…**アーメン。**

**讃美歌:89「共にいてください」**

**派遣:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。**

**報告:(1)管理委員会:25 日(水) 10:00～11:30 会堂・玄関部の停電案内、(2)会計担当:2016 年度献金袋についての案内。**

**後奏:「心より我は求めん」(J. ブラームス)**